

<研究ノート>

中国における老人の世代間扶養の状況と意識に関する調査（Ⅰ）*

——60歳以上を対象として——

張 野 凡
浅 野 仁

一. 調査目的と方法

1. 調査目的

『障害者保障法』（1990年12月28日に公布）、『児童保障法』（1991年9月4日に公布）、『婦人保障法』（1992年4月3日に公布）、『母子保健法』（1994年10月27日に公布）に次ぎ、1996年8月には『老人保障法』が正式に公布され、高齢化社会を迎えるための対策が法制度として制定された。『老人保障法』によると、老人の家族扶養、社会保障、地位と役割、法律的保護などが具体的に規定され、とくに家庭の扶養機能の維持及び社会保障機能の強化が明確に指摘された。老人扶養と日常生活への援助機能を持つ老人福祉は今や新たな段階を迎え始めている。

ところで、中国では老人の世代間扶養（同・別居子による老親扶養）を主要な扶養形態としている。そのうち、同居子による老親を扶養する割合が一番高いが、人口抑制政策の成功と産業化の加速につれて、中国は人口高齢化・核家族化・都市化・生活様式の多様化へと進行しつつある。と同時に、伝統的な主に同居子により老親を扶養する形態が大きなインパクトを受けている。老人の扶養形態変動の趨向からみれば、「同居子扶養」の割合が下降するとともに、その以外の扶養形態、たとえば、「別居子扶養」、「同・別居子の共同扶養」、及び「老人の自己扶養」、「夫婦間扶養」、「社会扶養」等の扶養形態の割合が増えつつある。伝統的な老人の世代間扶養状況及び意識はどのような状況にあるのか、また、老人扶養の動きはどのよう

に変わるのかについては極めて重要な研究課題である。

中国では急速な社会変動という状況に加えて、地域によるアンバランス性という特質を持っている。産業化先行の都市部と伝統的産業構造を守る農村部及び改革開放先行の沿海地域となお未開発の内地の地域間の格差が拡大する傾向が明らかになっている。本調査の東北部の大都会である長春市と遼寧省の農村部の二つの村は中国の中部に位置し、中国の経済・社会開発レベルの中間に位置する。したがって、今回の調査結果は中国の老人世代間扶養の一般的状況を説明し得るものと想定する。本調査によって、中国のアンバランスな社会構造下での産業構造、生活構造、意識構造、社会関係構造などの変動と老人世代間扶養の社会環境、扶養形態、扶養課題、扶養意識などの変動の関係及び今後の動きを検討してみよう。

ところで、老人の世代間扶養というのは、扶養する世代と扶養される世代間の相互作用であると言われ、子どもと老人両者の立場から考えれば、同時期・同地点・同事項の下に調査を行うことによって、世代間の相互作用関係が正しく把握できる。とりわけ世代間扶養についての意識の差を把握することは、世代間扶養にとって特別な意味を持っている。

現在中日両国の老人世代間扶養の状況・課題等は異なっているが、中国は日本に比べ、産業化・核家族化・人口高齢化での段階には差があるため、日本の経験を参照し、本調査のデータを今後の中日間の老人世代間扶養に関する比較研究の実証的データとしても活用したい。

*キーワード：中国、老人、扶養

ここではまず老人の扶養状況と意識に関する実態調査結果を報告し、次に報告したい「扶養者世代の調査」の結果を含めて老人世代間扶養についての研究の第一段階と位置付け、さらに 中日両国老人世代間扶養の比較研究を行い、今後の老人扶養に対する施策を推進するための提言をしたい。

2. 調査方法

(1) 調査対象者

中国の60歳以上の老人を対象に、そのうち、都市部では127サンプル、農村部では184サンプル、合せて311サンプルである。

(2) 調査期間

農村部の調査は1996年7月19日-25日に実施し、都市部の調査は7月27日-8月2日に行った。

(3) 調査地域と抽出方法

都市部の調査先の長春市は東北部の158万人口の都会である。中国吉林省長春市民政局の協力を得た。調査対象は長春市朝陽区の三つの街道の戸籍登録番号による60歳以上の老人の中から無作為抽出法で選び、調査員による個別面接調査法によって実施した。回収率は以下のとおりである。

調査地点	有効回収数	回収率
永昌街道	52人	75%
南湖街道	34人	59%
桂林街道	41人	62%

農村部では中国遼寧省遼中県楊士崗郷のある村において調査員による集団面接調査法と個別面接調査法で60歳以上老人の全数調査を実施した。この村の人口は1,782人で、産業は主に農業と川魚の養殖であり、中国の中等レベルの農村である。回収率は次のとおりである。

調査地点	有効回収数	回収率
靠山屯村	184人	94%

二. 調査結果の概要

1. 調査対象者の基本属性

(1) 性別

男性は153人（都市部の63人と農村部の90人）、女性は158人（都市部の64人と農村部の94人）である。男女比率は男性49.2%と、女性50.8%となっている。地域別で見ると、ほぼ性別と同率である（表1参照）。

(2) 年齢

調査対象の平均年齢は68.3歳である。前期高齢者（60-74歳）は78.1%、後期高齢者（75歳以上）は21.9%を占める。地域別と年齢にみると、都市部と農村部の前期高齢者の割合が75.6%と79.9%、後期高齢者が24.4%と21.1%となっている。農村部の後期高齢者が若干少なく、農村部の平均寿命が低いためであると思われる（表1参照）。

(3) 婚姻状況

中国では老人の結婚率は非常に高く、未婚率はわずか1.9%であり、「配偶者と離婚・別居」はわずか1.3%である（表2参照）。農村部では未婚者が都市部より多く、6人の中では5人が農村の老人であり、5人の未婚者は4人が男性である。全地域の男性未婚者が5人で、女性未婚者が1人でしかない。未婚の主な理由は以前の経済、身体、家族状況に関連し、貧困が最も要因となっている。

地域別で見ると、都市部と農村部の「配偶者と同居」の割合はほぼ同じ、70%前後となっている。「配偶者と死別」は都市部が少し高いが（27.6%）、その理由は都市部の後期高齢者が相対的に多いためである。

(4) 家族関係

老人の家族関係を家族構成人員間の相互作用関係と見なす。それは、配偶者、子ども、孫などの家族構成人員及びその構成によってみることができる。

表1 性・年齢・地域 人(%)

	全体	60-64歳	65-69歳	70-74歳	75-79歳	80歳以上
全体	311	108	80	55	38	30
%	100.0	34.7	25.7	17.7	12.2	9.7
男性:	153	56	39	25	19	14
%	100.0	36.6	25.5	16.3	12.4	9.2
女性	158	52	41	30	19	16
%	100.0	32.9	25.9	18.9	12.1	10.2
都市部	127	39	34	23	18	13
%	100.0	30.7	26.8	18.1	14.2	10.2
男性	63	21	17	11	8	6
%	100.0	33.3	26.9	17.6	12.7	9.5
女性	64	18	17	12	10	7
%	100.0	28.1	26.6	18.8	15.6	10.9
農村部	184	69	46	32	20	17
%	100.0	37.5	25.0	17.4	10.9	9.2
男性	90	35	22	14	11	8
%	100.0	38.9	24.4	15.6	12.2	8.9
女性	94	34	24	18	9	9
%	100.0	36.2	25.5	19.1	9.6	9.6

表2 老人の婚姻状況 人(%)

婚姻状態	N=311 (%)
未婚	6人 (1.9%)
既婚	
配偶者と同居	217人 (69.8%)
配偶者と死別	84人 (27%)
配偶者と離婚・別居	4人 (1.3%)

表3 老人の家族の構成人員——性別・地域別—— 複数回答(%)

	配偶者	自分・配偶者の親	未婚子	既婚息子	既婚娘	子どもの配偶者	孫	その他の親族	親族以外の人	誰もいない	全体
全体	217	10	25	153	31	170	177	0	1	11	311
%	69.8	3.2	8.0	49.2	10.0	54.7	56.9	0	0.3	3.5	100.0
男性	115	4	10	75	12	78	81	0	0	8	153
%	75.2	2.6	6.5	49.0	7.8	50.9	52.6	0	0	5.2	100.0
女性	102	6	15	78	19	92	96	0	1	3	158
%	64.6	3.8	9.5	49.4	12.0	58.2	60.8	0	0.6	1.9	100.0
都市	86	5	16	57	26	72	73	0	0	9	127
%	67.7	3.9	8.7	44.9	20.7	56.7	57.5	0	0	7.1	100.0
農村	131	5	9	96	5	98	104	0	1	2	184
%	71.2	2.7	4.9	52.2	2.7	53.3	45	0	0.5	1.1	100.0

中国では老人と配偶者および既婚子との同居率は高く、6割を占めている。地域別でみると、「配偶者と同居している」者は農村部に多く、それに対して「既婚子と暮している」をあげる者は都市部に多い。地域別による「平均寿命」、「死別率」、「子どもとの同居率」の差がその結果と関連している。そのうち、都市部では結婚した娘との同居者が多く、20.5%を占め、農村部ではわずか2.7%である。農村部では男子による老親扶養の伝統が続いていると思われる(表3参照)。性別では、農村部の女性は男子により扶養されるケースが多く、60.6%に達している。

次に以上の調査結果を家族類型で分類すると、都市部にしろ、農村部にしろ、3世代世帯が一番多く、6割前後であり、世代間扶養の特質を顕著に示している。しかし、4世代世帯は予想より少なく、1.9%ほどにとどまっている。地域別でみると、都市部では世代間扶養率は農村部より多く、それぞれ80.4%、63.1%である。都市部の若者が普段個人住宅を有しにくいことから、個人住宅が確保しやすい農村部で結婚した後、親と別居している子がかかり多く、農村部世帯の小規模化が都市部の水準を凌いでいる(図1参照)。

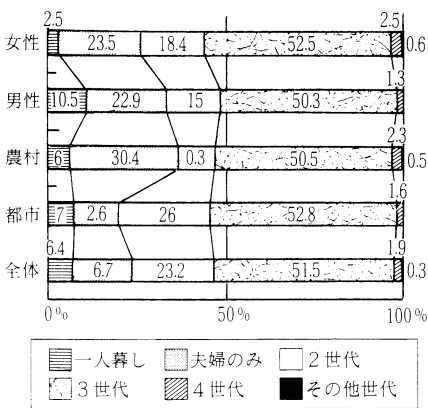


図1 老人家族類型

(5) 健康状況

老人の健康状態についてみると、「健康である」率は約6割に近く、「病気で、一日中寝込んでいる」と答えたのが低く、わずか2.6%である。

年齢別でみると、加齢とともに、「健康である」率が低下し、一方「病気で、一日中寝込んでいる」

率が高くなっている。つまり、60代の占める割合は7.4%であり、70代の占める割合は19.4%であり、80歳以上は43.3%である。

地域別でみると、都市部の老人の「健康である」と「あまり健康とは言えないが、病気ではない」及び「病気がちで、寝込むことがある」と「病気で、一日中寝込んでいる」比率を農村部と比べると、前者は農村部が90.8%に達し、都市部の74.8%より多い。後者は農村部が9.2%であり、都市部が25.2%である。農村部の「健康である」と回答する人が多い理由は、農村部の後期老人の方が都市部より少ないことと関連している。

(6) 学校教育の期間

まず中国教育制度の変動性と特殊性を説明し、教育期間期間を記述しよう。中国では「私塾」と「工農学校」(文盲を無くすための運動)が含まれている。中国の老人教育期間は小学校、中学校、高校、大学はそれぞれ(1-5年)、(6-9年)、(10-12年)、(12年以上)であり、老人の平均学校教育期間は4.1年である。

学校教育期間は性別によって異なる。男性は「大学以上」8.5%、「学校教育を受けていない」22.2%であり、それに対して女性はそれぞれ5.1%、33.5%である。

地域別による差異は、都市部では平均学校教育期間が6.9年で、そのうち「学校教育を受けていない」が14.9%で、「大学以上」が16.5%である。農村部では多くの老人は一般的に正規学校に入学したことがなく、ほとんど旧「私塾」と「工農学校」の教育を受け、都市部との学校教育期間の量と質に大きな較差が存在する。農村部では平均学校教育期間が2.2年で、「学校教育を受けていない」は主に農村部に属し、農村部の女性老人は41.5%に達している。「大学以上の教育」は皆無である。

(7) 一番長く従事した職業

産業構造により都市部と農村部の職業も異なっている。調査先農村部では主に農業、水産業の第一次産業のため、「農民」は全村の95.1%に達し、他は教師、幹部、労働者であり、商業など第三次産業に従事する人がほとんどいない。一方、都市

部では多様な産業構造を持ち、職業の分布も多様化している。長春市は文化型都市に属し、文化に関連する職業、管理職が相対的に多い(20.5%と18.1%)。

男女別での職業構成は農村部ではほとんど同じである。都市部では管理職に男性が多く、女性の3倍であり、無職は全て都市部の女性であり、男女間の現実的地位を示している。

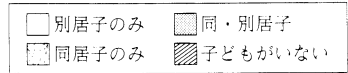
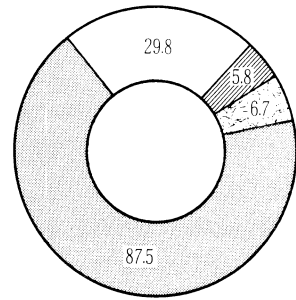


図2 老人と子どもとの同・別居状態

(8) 住宅

老人の住む住宅の平均寝室部数は2.4で、2-3寝室が一番多い。しかし、老人の59.2%が子供と同居していることを考慮すると、住宅の量は極めて不十分で、さらに、住宅の質も十分ではない。そのため、家族の日常生活、介護など不便なことが多い。

地域別でみると、都市部では三寝室が多く(49.6%)、平均部数は2.8寝室である。農村部では2寝室が多く、63.6%を占め、平均部数は2.1寝室である。都市部の老人家庭は子との同居率が高いが、住宅の面積は農村部より狭い。調査先農村部での伝統的居住形態は2寝室に分け、ひとつの寝室は老人が住み、もうひとつの寝室は同居子が住む。同居子が結婚すれば、別居する。最後に結婚した同居している息子は普段老人と一緒に暮している。そのゆえに、農村部では寝室が2部屋であることが多い。

表4 老人の子どもの有無及び同・別居

——性別・地域別—— 人(%)

	子どもがいる		子どもがいない	合計
	同居	別居		
全体	211	87	13	311
%	67.8	28.0	4.2	100.0
男性	99	44	10	153
%	64.7	28.8	6.5	100.0
女性	112	43	3	158
%	70.9	27.2	1.9	100.0
都市部	98	26	3	127
%	77.2	20.5	2.3	100.0
男性	49	12	2	63
%	77.8	19.0	3.2	100.0
女性	49	14	1	64
%	76.6	21.9	1.6	100.0
農村部	113	61	10	184
%	61.4	33.2	5.4	100.0
男性	50	32	8	90
%	55.6	35.6	8.8	100.0
女性	63	29	2	94
%	67.0	30.9	2.1	100.0

2. 老人の世代間扶養の形態・意識と実態

1) 老人の世代間扶養形態

本調査によると、老人と子の同居率はかなり高く、また同居・別居している子どもとの間に密接なかかわりを持っている。

(1) 子どもとの同・別居

本調査によると、ほとんどの老人に子どもがいる。現在子どもとの同・別居については、70%前後の老人は子どもと同居している。子どもと別居している老人は、都市部が3割強であり、農村部が約2割である。女性の同居率は男性より高い(図2参照と表4参照)。

(2) 同・別居している子どもとの将来の同居予定

「今後同・別居している子どもとの将来の同居予定」を聞くと、75.1%の老人は「同居したい」、10.1%の老人は「別居したい」と回答し、「未定」は7.4%であり、「分からない」は7.4%である。

地域別でみると、都市部では「同居したい」と「別居したい」と回答する人はそれぞれ74.8%、14.2%である。農村部では「同居したい」と「別居したい」の老人はそれぞれ70.1%、6.5%であ

る。この結果から都市部の別居意向は農村部より高いことが分かる。

次に、性別でみると、男性は「同居したい」と「別居したい」の老人はそれぞれ64.7%、10.5%である。女性は「同居したい」と「別居したい」の老人はそれぞれ79.1%、8.9%である。女性同居意向は男性より高いことが理解できる。

現在同居している子どもとの同居意向については88.4%の老人は「同居子と続いて同居予定」と答え、わずか3.4%の老人は「将来別居したい」と回答している。また、「分からない」は8.2%である。

(3) 子どもとの同居理由

「身の回りの世話をしてもらえる」と回答した人は約60%を占めている。都市部では37.8%であるのに対して、農村部では76.1%に達している。さらに「家族は多いほうが楽しい」、「子供が希望する」の順が多い。同居している子どもへの介護についての期待がとくに農村部に強くあるためと思われる(図3参照)。したがって、中国においては老人の世代間扶養の内容は主に身体的扶養であるといえる。

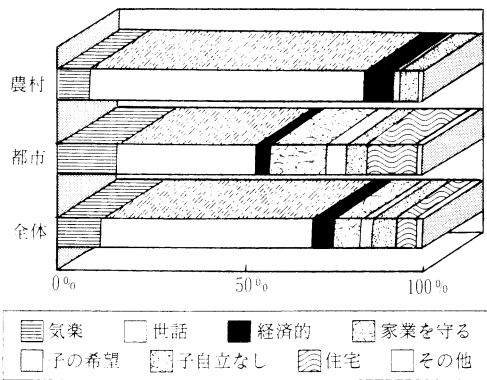


図3 子どもと同居の理由

(4) 別居している子どもとの距離

「子どもがいる」老人にはほとんど別居子がいるため、別居子との間にどのような関係を持っているかということは、老人の扶養にとっても重要なポイントである。別居している子との距離や付き合い頻度や子どもとの別居の主要な理由などから別居子と親との関係を知ることができる。

本調査によると、老人と別居している子供との距離は近く、約50%の老人は子どもとの距離が「30分以内」であり、「3時間以上」がわずか4.5%である。

地域別では、老人と別居している子供との距離が異なっている。農村部では地理的、社会分業的要因のために都市部と比較して相対的に近い。たとえば、農村部では10分以内」が70%であり、「3時間以上」が6.3%である。それに対して、都市部では、「30分-1時間」が一番多く、約40%であり、「30分以内」が15.3%である。

距離の遠近は別居子との交流、日常の世話、介護などと大いに関連する。また次の中国の別居子との付き合い頻度とも関連している(図4参照)。

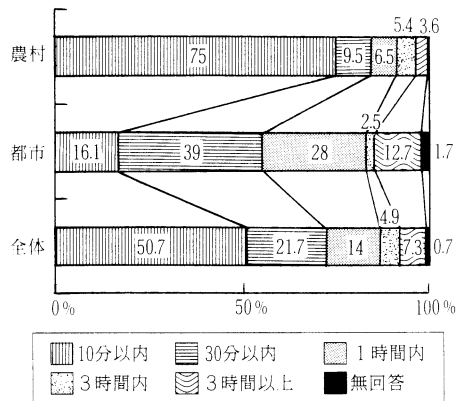


図4 別居子との距離

(5) 別居子との付き合い頻度

中国の老人の別居子との付き合い頻度には、非常に高く、「毎日」と「週に1回以上」は、合計約90%を占めている。「ほとんど会わない」はわずか0.6%である。

地域別では、別居の子どもとの付き合い頻度には明らかな相違がみられる。農村部は接触頻度がより高く、「毎日」が約70%であり、都市部では「週に1回以上」とする人が、一番多く、60%前後という結果である(図5参照)。

(6) 子どもとの別居理由

子どもとの別居の主要な理由をみると、「気楽に暮らしたい」、「子供が別居を希望する」、「子供の職場が遠く離れている」、「子どもが結婚してい

る」、「住宅が狭い」の順で回答されている。

都市部にしろ、農村部にしろ、「気楽に暮したい」が多く、回答者に占めている約半数を占める。同居家族の関係の複雑化は別居の要因となっている（図6参照）。

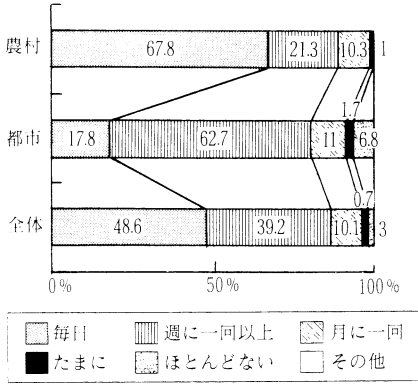


図5 別居子と付き合い頻度

性別・地域別にみると、女性と農村部の老人は最もその考え方を強く持っている。つまり、農村部では90.8%であり、女性は97.9%である（図7参照）。

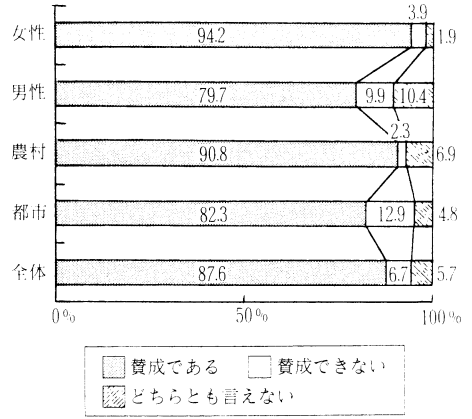


図7 老いては子に従え

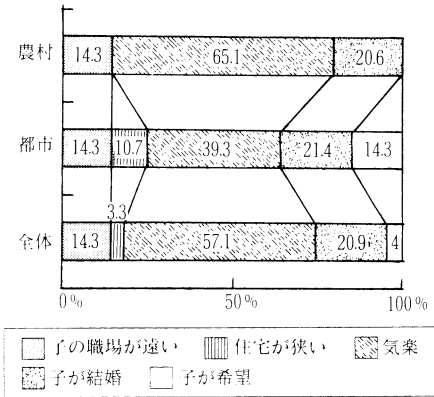


図6 子どもと別居している理由

(2) 子どもが結婚した後の同・別居の意識

全体として、「子どもが結婚した後、同居してよい」回答する人は過半数であり、「別居してよい」は少数である。三世大家族は大多数の老人の理想的家族形態であるとみられる。

性別・地域別では、女性は男性より多く、都市部は農村部より多い。都市部の男性と農村部の女性の同居意識が最も強い。この結果から都市部の男性については感情面、介護面、生活能力などは女性より弱く、また、農村部の女性の経済、家庭地位などは男性より弱いためであることが推察できる（表5参照）。

2) 老人の世代間扶養意識

本調査の結果によると、概して、老人は子の老後扶養に対する期待感を強く持ち、子どもによる家族の老親扶養が不可欠な機能であることを示している。

(1) 老いては子に従えの考え方

子による老親扶養は老後の第一選択となっている。「老いては子に従え」に対する「賛成する」は約90%前後であり、それに対して、「賛成できない」は6.7%である。

(3) 夫婦が一人になった時の同・別居の意識

「夫婦が一人になった時の同・別居」について設問すると、「同居してよい」はほとんどであり、「別居してよい」は極めて少ない。子は老人の感情的・生活上不可欠な一部分であるとみられる。

性別・地域別によってみると、都市部の男性と農村部の女性の同居意識が最も強い。都市部の男性60.7%であり、農村部の女性96.7%である（表5参照）。

(4) 家族による老親扶養が続けられるのか

「家族による老親扶養が続けられる」と答えた

表5 子どもとの同・別居意識

人(%)

	息子と同居	娘と同居	別居	分からない	無回答	合計：人(%)
子どもが結婚したとき同別居	161(54)	31(10.5)	76(25.6)	14(4.5)	16(5.4)	298(100.0)
夫婦が一人になったとき同別居	230(77.2)	49(16.5)	12(4)	7(2.3)	0	298(100.0)
身体が弱くなったとき同別居	232(77.9)	55(18.5)	7(2.3)	4(1.3)	0	298(100.0)

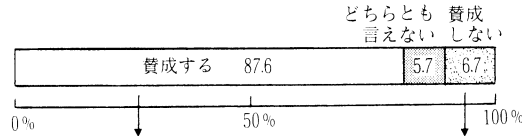


図8 老いては子に従えについて意見と理由

表6 子による扶養が続ける理由と続けない理由

人(%)

続けられる理由	人(%)	順	続けられない理由	人(%)	順
伝統的継続	133(51.0)	1	親不孝	12(60.0)	1
子の親孝行	79(30.3)	2	住宅が狭い	3(25.0)	2
替われないもの	41(15.7)	3	子が世話時間が無い	1(5.0)	3
国家の提唱	7(2.7)	4	経済的負担が重い	1(5.0)	3
その他	1(0.3)	5	その他	3(25.0)	2
合計	261(100.0)		合計	20(100.0)	

老人は約80%強に達し、それに対して、「家族による老親扶養が続けられない」はわずか20人となっている(図8参照)。

性別・地域別では、女性は男性より多く、農村部は都市部より多い。

(5) 家族による老親扶養が続けられる理由

家族による老親扶養が続けられる理由を全体としてみると、1番目と2番目は「伝統的習慣の持続」と「子どもの親孝行」である。

性別・地域別によってみると、中国の親孝行の倫理が現在においても残っていることが反映されている。都市部では約4割が「子どもの親孝行」を一番目として選び、次は「伝統的習慣の持続」となっている。農村部では「伝統的習慣の持続」を一番目に選び、次は「子どもの親孝行」である(表6参照)。

3) 老人の世代間扶養の実態

ここでは老人の世代間扶養を三つの扶養内容に分け、経済的扶養、身体的介護、情緒的サポートの内訳によって、調査結果を紹介したい。

(1) 経済的扶養

経済的扶養は、老人の収入源や同・別居子からの援助などでみられる。

①主要な収入源

全体として対象者の収入源構成からみると、回答者が多い事項は、「公的年金」、「子どもからの援助」、「就業による収入」であり、「何もない」は10人(3.2%)である。

性別・地域別では、その格差は明らかとなっている。男性は「公的年金」、「就業による収入」、「子どもからの援助」の順位で多く、女性は「子どもからの援助」、「公的年金」、「就業による収入」の順である(表7参照)。

表7 老人の主要な収入源

人(%)

	就業収入	年金	預貯金	子の援助	財産収入	生活保護	その他	何もない	無回答	合計
全体	77	117	7	82	1	6	6	10	5	311
%	24.8	37.6	3.3	26.7	0.3	1.9	1.9	3.2	1.6	100.0
都市	8	101	0	9	1	1	6	0	1	127
%	6.3	79.5	0	7.1	0.8	0.8	4.7	0	0.8	100.0
農村	69	16	7	73	0	5	0	10	4	184
%	37.5	8.7	3.8	39.7	0	2.7	0	5.4	2.2	100.0
男性	44	68	4	26	1	4	0	3	3	153
%	28.8	44.5	2.6	17.0	0.7	2.6	0	1.9	1.9	100.0
女性	33	49	3	56	0	2	6	7	2	158
%	20.9	31.0	1.9	35.4	0	1.3	3.8	4.4	1.3	100.0

都市部では「公的年金をもらえる人」が8割であり、「子どもからの援助」による人が9人(7.3%)である。そのうち都市部の男性は女性より多い。都市部では年金制度がかなり普及し、子へ経済的依存度が弱いものとみられる。農村部では年金制度が充実していないため、年金をもらえる人はわずか16人(8.7%)となっており、ほとんど村役所の役員である。普通の農民は一人も受給者はいない。そのため、「子どもからの援助」と「就業による収入」が主要な収入源となっている。農村部の男性は「就業による収入」が一番多く、次は「子どもからの援助」であり、女性は「子どもからの援助」が一番多く、次は「就業による収入」である。農村部女性は子への経済的依存度が一番高いものといわれ、農村部の年金制度の拡充が大きな課題となっている。したがって、農村部では老人の世代間扶養は主に経済的扶養であると結論づけられる。

②同居している子どもからの経済的援助

子からの経済援助構成によってみると、「生活費の大部分」がほぼ半数を占め、「子どもから経済的援助がない」が28%を占めている。子どもからの経済的援助は老人の生計にとって極めて重要である。(図9参照)。

③別居している子どもからの経済的援助

本調査によると、老人は別居子との密接な経済的関係を持ち、「別居子からの経済的援助を受けた」人が70%強を占め、「受けていない」人が30%

未満である。別居子からの経済的援助の程度からみると、「小遣い程度」「生活費の一部分」「生活費の大部分」の順である。(図10参照)。

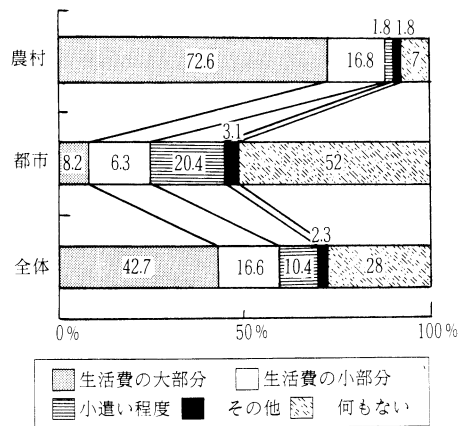


図9 同居子からの経済的援助

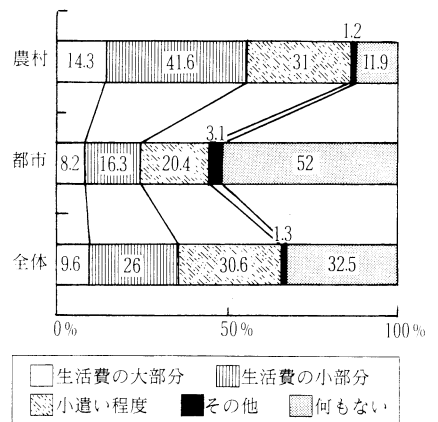


図10 別居子からの経済的援助

(2) 身体的介護

世代間扶養のひとつの内容としての身体的介護は、主に同居している子どもによって担われている。世代間介護（子ども及び配偶者）はほとんど同居子に依っているため、老人は同居子への期待を強く持っている。世代間介護の質が老人介護の質を決めていると思われる。

①身体が不自由になった場合の主としての身の回りの世話の人

身体が不自由になった場合の主としての身の回りの世話の人については、世代内介護（夫婦間）は、31.8%であり、世代間介護（子ども及び配偶者）は、59.2%であり、世代外介護は2.9%であり、社会的介護は、4.1%であり、その他は0.9%である。以上の結果から家族介護（世代内介護、世代間介護、世代外介護を含む）は、主要な介護形態であり、そして世代間の介護が一番目の介護形態となっている。社会的介護の機能がほとんど発揮されていない。

②身体が弱くなった時の同・別居の意識

老人の身体状態によって、子と同居している意向が強くなっている。「身体が弱くなった時の同・別居」を設問すると、以下の傾向が顕著に見出せる。「同居してよい」はほとんどであり、「別居してよい」はわずかである。身体的扶養が同居志向に依存していることが分かる（表5参照）。

(3) 情緒的サポート

世代間扶養は経済面・身体面であるだけでなく、心理的なサポートも不可欠である。

①子どもとの付き合い方

子供との付き合い方については、「一緒に生活できるのがよい」と「子供や孫とは時々会って食事や会話をするのがよい」の回答が多く、次は「子供や孫とはたまに会話をするのがよい」である。「子供や孫とは全く会わずに生活するのがよい」はほとんどみられない（0.3%）。

性別では女性と男性の回答はほぼ同じである。しかし、地域別でこれを見ると、農村部では80%強であり、都市部では70%弱である。都市部では

「子供や孫とはたまに会話をするのがよい」の率がいくぶん高く、31.5%である（図11参照）。

(2) 心配事や悩み事ができた時の相談に乗ってくれる人

「心配事や悩み事ができた時の相談に乗ってくれる人」は「配偶者」、「同居子」と「別居子」、「近隣」「親族」の順で多い。「配偶者」、「同居子」と「別居子」が最も多い（図12参照）。

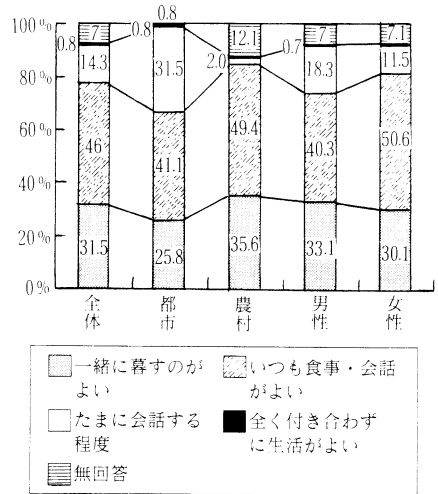


図 11 子どもと付き合い方法

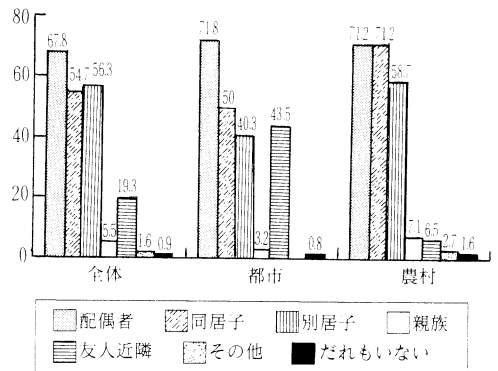


図 12 悩み事ができたときの相談に乗ってくれる人

3. 社会的サポート

中国の老人に対するサポート・システムには、家族以外の親族・近隣・地域・元職場・福祉団体・機関等がある。調査によると、都市部では親

族・近隣・元職場からのサポートが多く、農村部では親族・近隣からの順位で多い。老人に対するサポート・システムの地域化・専門職化の必要性が共通の課題となっている。

(1) 困ったことがあれば、誰が世話をしてくれる

複数回答による設問によると、「困ったことがあれば、誰が世話をしてくれる」(配偶者を除く)は、「子ども」、「近隣」、「親族」、「元職場」、「政府」、「地域」という順位で多い。子どもを家族的サポートとして、すでに上記で検討したので、ここでそれ以外のサポート、すなわち、社会的サポートについて考察したい。

現在の中国の老人に対するサポート・システムは、血縁・地縁・職縁に分類してみると、血縁の親密さと住居の遠近及び職業との関わりによっている。都市部では血縁関係の意義が狭くなり、主に親子・兄弟関係を中核に、血縁関係が単純化され、職縁関係は社会関係のなかで重要となっている。農村部では地理条件・産業化レベルの制限を受けるため、血縁・地縁の影響が残っている。

性別にみると、男性と女性の回答率順位は同じであり、「子ども」、「近隣」、「親族」、「元職場」等となっている。主要な事項の回答を地域別でみると、都市部では、「子ども」、「元職場」、「近隣」、「親族」等の順である。農村部では、「子ども」、「近隣」、「親」、「政府」の順である(図13参照)。

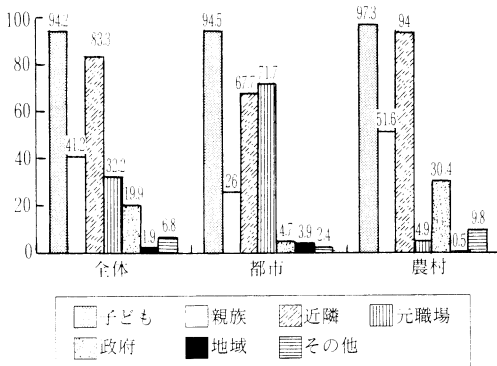


図13 困ったことがあれば世話をしてくれる人

(2) 親族と近隣及び地域からのサポート

①親族と近隣との交流の頻度

老人の社会関係は主に親族と近隣関係となって

いる。調査によると、老人については近隣関係は親族関係より密接なものである。近隣との交流の頻度は「毎日交流」が一番多く、「ほとんど交流しない」は2人(0.6%)である。親族との交流の頻度は「たまに交流」が一番多く、次は「ときどき交流」であり、「毎日交流」が予想より少ない。

地域別でみると、「親族との交流頻度」について都市部と農村部は同じ順位で、「たまに交流」、「ときどき交流」、「毎日交流」、「ほとんど交流しない」の順であり、農村部の回答状況を考えれば、想定したより頻度が低い。農村部の伝統的大家族意識が薄くなっているものとみられる。

それに対して、「近隣との交流の頻度」はかなり高い。都市部では「ときどき交流」が50%台であり、次は「毎日交流」が約40%である。さらに、

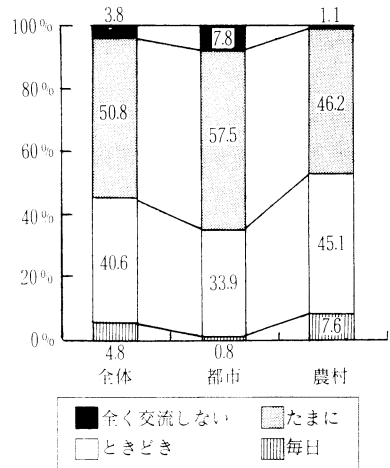


図14 親族と交流頻度

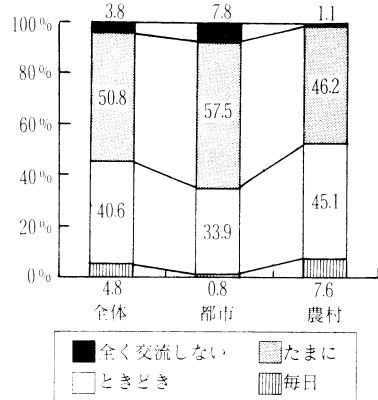


図15 近隣と交流頻度

農村部では近隣との交流頻度が非常に高く、「毎日交流」が70%前後である（図14、15参照）。

②地域と近隣からの世話

ここでは回答率が多い事項を列挙しよう。「治安」・「娯楽」・「相談」・「友愛訪問」・「買物」などが相対的に多く、福祉サービスの内容が少ない。近隣からの世話は地域より多く、近隣互助が進んでいるが、地域の福祉機能はあまり発揮されていないと思われる。たとえば、入浴や介護などが回答が少ない。近隣と地域の世話が自発的段階にとどまっている（表8参照）。

(3) 公的サポート

中国の現在の老人に対する公的サポートについては、社会保障制度を中心に、主に社会保険・社会救助制度・社会福祉サービス等の内容からなっている。老人にとって年金制度・医療保険制度・福祉サービスなどが必要であることが明らかとなった。調査によると、中国の都市部では社会保障制度が構築され、社会化・民営化・効率化・公平化・法治化などが改革の課題となっている。農村部では制度の構築と普及が改革の重点となっている。

地域により社会保障の内容・受給人数などが異

なっている。都市部では年金・医療保険・公営住宅などを「受けた」が多く、「何も受けない」は15人（11.8%）であり、一方、女子がその比率は86.7%を占めている。一方、農村部では年金・医療保険・公営住宅を受ける人が少なく、救助金を受けている人が相対的に多く、「何も受けない」人は70%強に及ぶ。

ところが、社会福祉サービス対象者が少なく、都市部で1.6%しかない。農村部では回答する人が皆無となっている。中国の社会保障制度の問題点が明らかに示されている（図16参照）。

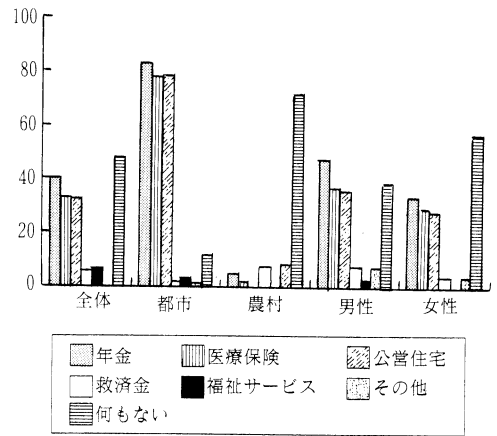


図 16 社会保障の受給状況

表 8 地域と近隣からの世話 複数回答(%)

	地域からの世話	順位	近隣からの世話	順位
食事	3人(0.9%)	8	7人(2.3%)	9
介護	2人(0.6%)	9	21人(6.8%)	8
送迎	7人(2.3%)	7	25人(8%)	7
相談	139人(44.7%)	3	174人(55.9%)	3
入浴	3人(0.9%)	8	0	
買物	38人(12.2%)	5	70人(22.5%)	5
友愛訪問	75人(24.1%)	4	132人(42.4%)	4
家族関係調停	14人(4.5%)	6	31人(10%)	6
治療	7人(2.3%)	7	6人(1.9%)	10
一緒に娯楽	141人(45.3%)	2	201人(64.6%)	2
治安	198人(63.7%)	1	243人(78.1%)	1
その他	42人(13.5%)		50人(16.1%)	
ない	81人(26%)		31人(10%)	

三. 老人の世代間扶養の今後の動向 とまとめ

中国の人口変動の高齢化・少子化、産業化、生活空間の都市化、生活構造の多様化、家族構成の小規模化の加速に伴い、老人の世代間扶養もその方向へ運動しつつある。現在の老人扶養段階については、新しい方向への過渡期にある。老人扶養の現況を通じ、今後の動向を探求するのは、対応策を検討する上で重要な一歩である。

1. 老人の世代間扶養の今後の動向

(1) 別居子による世代間扶養形態の増加

図17のように、老人扶養形態は通常四つのタイプに分類できる。それは「家族内扶養」、「老人の自己扶養」、「社会扶養」、「その他扶養」である。そのうち、「家族内扶養」は他の扶養形態に比べると、非常に重要である。さらに、「家族内扶養」を「世代内扶養－夫婦間扶養」、「世代間扶養－親子間扶養」、「世代外扶養－親族・他人間の扶養」の三つの類型に分類する。本調査によると、「世代間扶養－親子間扶養」が老人扶養形態に占める割合が最も高いことが明らかになった。

また、「世代間扶養－親子間扶養」は「同居子の扶養」、「別居子の扶養」、「同居子と別居子の共同扶養」に分けられる。そのうち、居住形態によって分けると、「同居子の扶養」が約7割を占めている。

しかも、核家族化の加速につれて、親と別居している子が増えると、「同居子の扶養」率が低下し、「別居子の扶養」、「同居子と別居子の共同扶

養」の増加が趨勢となる。

(2) 老人の世代間互動關係の弱体化

伝統的な老親扶養形態は、家庭内分業に応じて世代間の關係が相互的扶養の特質を持ち、すなわち、子が親に対して面倒をみてあげると同時に、親から家業の継続権や生計の提供や家事などの援助を受けられる。大家族の解体につれて、家業の継続や生計の提供の役割がかなり失われたが、家事の援助が現在なお重要な役割を果たしている。換言すれば、経済的相互關係は薄くなったが、日常生活における援助、感情の交流の側面において、相互のサポートがみられる。

「子から親への援助」については説明したので、ここでは「親から子への援助」を補完して説明しておこう。本調査の「子どもに対する援助」の複数設問によると、「親から子への援助」は主に子・孫への生活上の援助を提供する。「孫の世話」が70%台であり、次は食事等の家事、住居の提供等である。それに対して、「生活費の大部分の提供」と「生活費の一部分提供」のような現金援助は少なく、合せて21人(7%)となっている。

ところが、別居子の割合が増加し、地理的距離が遠ざかるにしたがって、親と子との扶養の内容と頻度が減り、心理的距離も広がり、世代間の相互關係の頻度と強度が弱くなっていることが考察できる。

(3) 老人の世代間扶養の地域による格差の拡大

中国の老人扶養への援助については、農村部の近隣互助の機能と都市部の国家の保障機能・元職場の援助機能が比較的にみられるが、農村部の国家の保障機能とすべての地域の福祉機能がほとんど

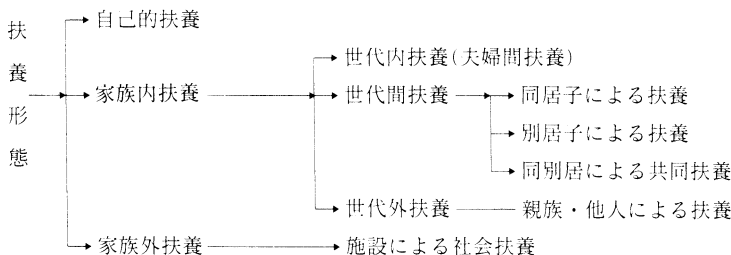


図17 家族扶養形態

みられない。したがって、老人にとって、家族の扶養機能、とくに世代間扶養機能が大切なものとなっている。社会保障制度を構築するにつれて、地域による老人への家族外援助が今後の方向となっている。

中国では地理的位置と社会開発の程度によって、経済的状況・生活様式・社会福祉の方法の地域差が生じる。中国の世代間扶養も沿海・内地の地理的因子と都市部・農村部の開発程度を分類の基準として、六つの体系に分けられる。すなわち、A（沿海都市型）、B（内地都市型）、AB（中部型都市）；C（沿海農村型）、D（内地農村型）、CD（中部農村型）である。経済的・社会開発・情報流通の相違性によって老人扶養の課題と老人福祉のやり方も異なっている。全般的な変動方向はB→AB→AとD→CD→Cとなると思われる。中国の老人世代間扶養と老人福祉の多様性を反映している。

2. まとめ

本調査の結果をまとめると、中国では老人の世代間扶養形態が重要な扶養形態として維持されている。老人の世代間扶養には、同居子及び別居子からの経済的扶養・身体的介護・情緒的サポートの扶養内容が含まれている。親と子の間には厳密な相互援助関係がある。老親扶養は、老人の老後生活の主要な場として、扶養機能のみを超え、家族内での家族倫理の維持・伝統的文化の伝承・家族外での社会組織秩序の安定などの機能が発揮されると思われ。中国の現行社会保障制度の量的・質的面的については、老人の世代間扶養への援助が中心となるため、家族の扶養機能はもっと大切な役割を果たしている。しかし、老人への家族扶養機能は、弱体化しつつある動向から観察して、都市部では社会保障制度の拡充が改革の重点となるが、農村部では社会保障制度の構築が改革の急務となるといってよい。

家族扶養機能を維持するとともに社会保障機能を強化することが、中国の老人扶養対策の今後の方向であろう。

* * *

付録：調査票

- Q 1. 性別：1. 男性 2. 女性
- Q 2. 年齢：__歳
- Q 3. 配偶関係：1. 未婚 2. 配偶者と同居
3. 配偶者と別居 4. 配偶者と死別
- Q 4. 家族の構成者（複数回答）：1. 配偶者
2. 自分或は配偶者の親 3. 未婚の子 4. 既婚の息子 5. 既婚の娘 6. 子どもの配偶者 7. 孫 8. その他の親族 9. 親族以外の人 10. 誰もいない
- Q 5. 健康状態：1. 健康である 2. あまり健康と言えないが病気ではない 3. 病気がちで寝込むことがある 4. 寝たきり
- Q 6. 退職前或は現在の仕事：1. 農民 2. 労働者 3. 公務員或は政府・共産党官員
4. 教師・医者・技術系勤め人 5. 会社の役員 6. 自営商工業者 7. 軍人 8. 無職 9. その他
- Q 7. 学校教育の期間（旧制）：__年間
- Q 8. 寝室の数：1. 一寝室 2. 二寝室 3. 三寝室 四. 四寝室
- Q 9. 現在住所の地域：1. 農村 2. 都市
- Q 10. 子どもとの同別居状態（複数回答）：1. 結婚している息子 2. 結婚している娘 3. 結婚していない息子 4. 結婚していない娘 5. 子どもとは別居
- Q 11. 子どもとの同居の主要な理由：1. 家族は多い方が楽しい 2. 身の回りの世話をしてもらえる 3. 経済的である 4. 家や家業を守る 5. 子どもが希望する 6. 親子の同居は自然である 7. 子どもが一人だちしていない 8. その他
- Q 12. 子どもとの別居の主要な理由：1. 子どもの職場が遠く離れている 2. 住宅が狭い 3. 気楽に暮したい 4. 子どもが別居を希望する 5. 子どもが結婚している 6. その他
- Q 13. 現在同居している子どもとの将来の同居予定：1. はい 2. いいえ 3. 分からない
- Q 14. 子どもが結婚した後の同別居の意識：1. 息子夫婦と同居するのがよい 2. 娘夫婦と同居するのがよい 3. 子供夫婦とは別居するのがよい 4. 分からない

Q15. 夫婦が一人になったときの別居の意識：

1. 息子夫婦と同居するのがよい
2. 娘夫婦と同居するのがよい
3. 子供夫婦とは別居するのがよい
4. 分からない

Q16. 身体が弱くなった時の別居の意識：1. 息子夫婦と同居するのがよい 2. 娘夫婦と同居するのがよい 3. 子供夫婦とは別居するのがよい 4. 分からない

Q17. 主要な収入源：1. 就業による収入 2. 公的年金 3. 私的年金 4. 預貯金などからの引出し 5. 財産からの収入 6. 子どもからの援助 7. 生活保護 8. その他 9. 何もしていない

Q18. 同居している子どもからの経済的援助（複数回答）：1. 生活費の大部分 2. 生活費の一部分 3. 小遣い程度 4. その他

Q19. 別居している子どもからの経済的援助：1. 生活費の大部分 2. 生活費の一部分 3. 小遣い程度 4. その他

Q20. 子どもからの援助を受けていない主要な理由：1. 経済的困っていない 2. 援助できる経済的余裕が子供側にない 3. 親に対して援助しようという気が子供側にない 4. その他

Q21. 子どもに対する援助：1. 生活費の大部分 2. 生活費の一部分 3. 住居の提供 4. 孫の世話 5. 食事などの家事 6. その他

Q22. 身体が不自由になった場合の主としての身の回りの世話：1. 配偶者 2. 息子 3. 嫁 4. 娘 5. 子ども達全員 6. その他の親族 7. 自分で雇った家政婦 8. ホームヘルパー 9. 自宅以外の施設 10. その他 11. 誰もいない 12. 分からない

Q23. なぜ十分な世話を受てくれないか（複数回答）：1. 子どもの昼の仕事をするため 2. 配偶者の病気のため 3. 住宅等の環境の制限のため 4. 親不孝 5. 子の孫の世話 6. 家族の介護能力の制限 7. 病院に遠い 8. その他 9. 十分な世話を受けた

Q24. 一番近くに住む別居子との距離：1. 十分以内 2. 三十分以内 3. 一時間以内 4. 三時間以内 5. 三時間以上

Q25. 一番近くに住む別居子との付き合いの頻度

1. ほとんど毎日
2. 週に1回以上
3. 年に数回
4. ほとんど会わない
5. 会う回数は少ないが手紙や電話などで交流がある
6. その他

Q26. 子どもと孫との付き合い方：1. いつも一緒に生活できるのがよい 2. 子どもや孫とはときどき会って食事や会話をするのがよい 3. 子どもや孫とはたまに会話する程度 4. 子どもや孫とは全く付き合わずに生活するのがよい

Q27. 心配事や悩み事ができたとき相談に乗ってくれる人（複数回答）：1. 配偶者 2. 同居子 3. 別居子 4. その以外の親族 5. 親しい友人・近隣 6. その他 7. あてにできる人はいない

Q28. 老いては子に従えの考え：1 賛成である 2 賛成できない 3 どちらとも言えない

Q29. 理想的な家族とは親・子・孫が一緒に暮している家族と思うか：1. そう思う 2. そうは思わない 3. どちらとも言えない

Q30. 家族による老親扶養は今後続けられるか：1. 続けられる 2. どちらとも言えない 3. 続けられない

Q31. 続けられる理由（複数回答）：1. 伝統的習慣の維持 2. 国家と社会の支持 3. 子どもの親孝行 4. 子どもと一緒に同居すれば気楽になる 5. 他の場所がない 6. その他 7. 分からない

Q32. 続けられない理由（複数回答）：1. 子の経済負担が多い 2. 介護の担い手がない 3. 子の親の扶養意識がない 4. 嫁との関係が難しい 5. 社会の養老施設の増加 6. 住の環境の影響 7. 社会環境の影響 8. その他 9. 分からない

Q33. 以下の社会保障内容を受けられているのか（複数回答）：1. 年金 2. 医療保険 3. 公営住宅 4. 救済金 5. 公傷等の手当 6. その他 7. 何ももらえない

Q34. 社会保障の現状に満足しているのか：1. とても満足する 2. まあ満足する 3. やや満足しない 4. 満足しない 5. 分からない

Q35. 郷・村と街道・居民委員会から以下のよう

- なサービスを受けられているのか（複数回答）：1. 食事 2. 入浴 3. かかりつけの医者 4. 介護 5. 交通 6. 買物 7. 娯楽 8. 友愛訪問 9. 治安 10. 悩み事の相談 11. 家族内矛盾の調停 12. その他
- Q36. 近隣から以下のようなサポートを受けられていたか（複数回答）：1. 家事の援助 2. 食事援助 3. 介護 4. お風呂 5. 交通 6. 買物 7. 悩み事の相談 8. 家族内矛盾の調停 9. 生活用品を受領する 10. 留守番 11. 一緒に娯楽 12. 孫の世話 13. その他 14. 受けたことがない
- Q37. 親族から以下のようなサポートを受けられていたか（複数回答）：1. 家事の援助 2. 食事援助 3. 介護 4. お風呂 5. 交通 6. 買物 7. 悩み事の相談 8. 家族内矛盾の調停 9. 生活用品を受領する 10. 留守番 11. 一緒に娯楽 12. 孫の世話 13. その他 14. 受けたことがない
- Q38. 近隣と交流の頻度：1. 毎日のように交流する 2. ときどき交流する 3. たまに交流する 4. あまり交流しない
- Q39. 親族と交流の頻度：1. 毎日のように交流する 2. ときどき交流する 3. たまに交流する 4. あまり交流しない
- Q40. 困ったことがあったら、子ども以外の親族からの世話をしてくれるか：1. いつも世話してくれる 2. ときどき世話してくれる 3. たまに世話してくれる 4. ほとんど世話してくれない

Study of the Support and Perceptions of the Elderly in China (I)

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the support and perceptions of the elderly aged 60 years and older in China. Three hundred and eleven subjects were obtained from an urban and a rural areas, conducted in July–August, 1996.

The results showed that ; 1) The elderly living with their children were approximately 70%. 2) Most of older people obtained various kinds of support from their children. One of factors which influence the living arrangements of the elderly is attitude regarding living arrangements. 3) Nearly 75% of those aged 60 and above responded that “it is good to reside with children”. In China, we still have preference for living with and being supported by adult children as an ideal for elderly support. 4) Social services for older persons in China still are immature so that small amount of the elderly received them. 5) At the present stage of development, one of the main stress should be placed on expanding traditional forms of welfare services. 6) Finally, we would like to propose the importance of “Kinstitutions”, which means a hybrid symbiotic kinships and institutional relationships. The evidence we have described so far strongly suggested that most of the support still is undertaken by family members.

Key Words : China, Elderly, Support